

理性使用の性的差異 『三ギニー』あるいはヴァージニア・ウルフ版「啓蒙とは何か」

中山徹

1 アウトサイダーと学者

われわれはどうすれば戦争を防ぐことができるのか——この永遠の問題へのある種の応答として書かれたヴァージニア・ウルフの「小説的エッセイ」『三ギニー』（一九三八年）は、きわめて逆説的な論理を読者に突きつける。それは、社会的にもっとも弱い存在が、戦争の防止においても強い影響力をもちうる、という逆説である。ウルフは戦争防止の問題を一貫して「教育ある男を父にもつ娘たち」という特殊な立場から考察しているが、この「娘たち」こそは、そうした逆説を具現する存在にはかならない。「教育ある男たち」には、二つの側面が

男女は多くの本能を共有していますが、戦うことはつねに男の習性であって女の習性ではありませんでした。（Woolf 120）

ある。一つは、軍をはじめ証券取引所、出版業、教会、公共機関、法曹界など、公的な専門職に就く男たち。彼らはこうした公的職業から基本的に女性を排除しようとする。もう一つは、「娘たち」が家庭の外で働くことをゆるさない父親たち。彼らは「娘たち」を家庭という私的領域に閉じ込め、すくなくとも経済的に自らに従属させる。こうした排除と従属により「娘たち」は、「労働者階級の女たちよりも弱い」、つまり社会的にもっとも弱い階級よりもさらに弱い階級を形成する。「私たちの階級は、この国のあらゆる階級のなかでもっとも弱い階級です。私たちには自分の意志を通すための武器がありません。（…）」教育ある男を父にもつ娘たちは、直接的な影響力をもちません。

それは確かです。「しかし」とウルフは続けていう、「彼女たちには何にもまさる力があります。すなわち、教育ある男たちに対して彼女たちが行使できる影響力が」(Woolf 127)。この途方もない逆説は、いかなる論拠に支えられているのか。

ウルフは、上のような意味で社会の「アウトサイダー」といえるこの「娘たち」のもつ「武器」を、「無関心〔無私無欲 indifference〕」と「知的自由」という言葉で表現する。「無関心」とは、あらゆる関心を括弧に入れ、先入見を無効にすることを意味する。その基盤にあるのは「理性」である。「無関心を本能のみならず理性に基づかせることがアウトサイダーの義務となるでしょう」(Woolf 233)。「知的自由」はその名の通り「自分の意見を自分の言葉で自分の望むときに好きなだけ自分の意のままに述べる」(Woolf 223)ことを意味する。両者は相互補完的な関係にあると考えてよい。「知的自由」を欠いた「無関心」は、なにも関与しない静観的な態度になりかねないし、「無関心」に裏打ちされない「知的自由」は、独善的な思考になりかねないからだ。しかし、「影響力」の内容をこのように説明されても、先の逆説の論拠は依然として明確ではない。それどころか、ここでは新たな疑問が浮上する。なぜ「無関心」と「知的自由」が「アウトサイダー」の特権的な「武器」になるのか。それはむしろ公的な場で行使されてはじめて「力」を

もつのではないか。

ウルフは逆に考える。公的な場では「無関心」と「知的自由」はむしろ制限されるのだ、と。このポイントは、ウルフが「アウトサイダー」のあり方を説明するために言及した三つの逸話の最初のもの(出典は一九三七年二月二〇日付『イヴニング・スタンダード』)を参照すると分かりやすい。ウリッジの女性首長が地元のパザーで「私個人は、それが戦争に負担することになるなら、靴下一つ繕うこともしません」と語ったところ、多くの「ウリッジの公衆」のひんしゆくを買った。当時ウリッジでは有権者の実に一万二千人が地元の兵器工場に雇われていたからである(Woolf 241)。要するにこの首長は、戦争による雇用の確保という公的な関心を括弧に入れて「自分の意見を自分の意のままに」述べたのである。もし彼女が首長―有権者という公的関係の内部で思考していたら、公的な関心にはばられて、こうした発言はできなかっただろう。ひとは現実にとりより知的に公的関係の外部にいななければ、つまり「アウトサイダー」でなければ、「無関心」と「知的自由」を十全に行使できない(もちろん逆も真である)。これがこの逸話の教訓である。

このように『三ギニー』は、その論理の核に厄介な逆説をかかえた、独特で風変わりなテキストにみえる。実際この作品は、

Q・D・リーヴィスをはじめとする同時代の評者たちを困惑させた。しかし私には、『三ギニー』にはある強力な後ろ盾となるテクストがあるように思えてならない(ウルフはおそらく自覚していないだろうが)。それはカントの「啓蒙とは何か」(一七八四年)である。二つのテクストのあいだには、思考のレベルにおいて本質的な共通性がないだろうか。三点に分けて指摘しよう。

一。カントは、「他人の指導なしに自分の悟性を用いる能力のない」状態を「人間が自ら招いた未成年状態」と呼び、そこから抜け出すことが「啓蒙」であるとしたり。「啓蒙」の実現のために必要なのが「自由」、とくに「自分の理性を公的に使用する自由」である。理性の公的使用は「ある人が読書世界の全公衆を前にして学者として理性を使用すること」を意味し、対して「私的使用」は「ある委託された市民としての地位もしくは官職において、自分に許される理性使用」を意味する。「啓蒙」の実現のためには、前者はつねに自由でなければならぬが、後者が制限されても支障はない。カントはいう。「公共体の関心事となる業務では一定の機構を必要とするものがあり、これによって公共体の若干の成員はもっぱら受動的な態度をとらざるをえない。〔…〕しかし、機構のこの役割を担う同じ人が、同時に自らを公共体全体の成員、そればかりかさらに世界市民社会の成員とみなすかぎり、したがって書物をとおして本

来の意味における公衆に語りかける学者の資格においてそうするならば、その人にはもちろん議論することは許される」(カント 27-28)。これはウリッジの逸話にあてはめると分かりやすい。首長は、「委託された官職」である以上、「公共体の関心事」(戦争による雇用の確保)に従って「受動的に」思考せざるをえない。しかしこの人が首長というより「アウトサイダー」として自分の意見(戦争反対)を意のままに述べる自由は制限されてはならない、ウルフはそう考えるのだ。したがってウルフのいう「アウトサイダー」とはカントのいう「世界市民社会の成員」のことであり(ウルフはアウトサイダーの「祖国」は「全世界」であるという(Woolf 234))、ウルフのいう「無関心」と「知的自由」の行使とはカントのいう「理性の公的使用」のことである。

二。理性を公的に使用する存在、「学者」は、職業や社会的身分ではない。それは、理性を私的に使用せざるをえない存在(カント自身の例では、将校、納税者としての市民、聖職者)が理性を公的に使用した瞬間に出来るものである。つまりそれは、そうした諸々の社会的身分のそれ自身からのずれにつけられた名前なのである。同じことはウルフの「アウトサイダー」にもいえる。それはたんに、経験的に公的領域の外部にいる存在ではない。自治体の首長であれ誰であれ、「無関心」と

「知的自由」の行使によって自らの社会的位置付けから逸脱するのであれば、その人はその瞬間に「アウトサイダー」になるからである。

三。カントは通常の公的／私的の意味を逆転させている。彼にとつて、一般的な意味で公的な機構における理性使用は「私的」であり、自由な私的議論における理性使用は「公的」である。『3ギニー』でも同様のことが起こっている。ウルフは「知的自由」の行使を「私的な印刷機」によるリーフレットの印刷という例で説明している。それで自分の意見が「公衆」にとどくのかという想定される問いに対して、ウルフはこう答える。

「公衆」とは〔…〕まさに私たち〔教育ある男を父にもつ娘たち〕のような存在のことです。公衆は部屋で生活し、通りを歩いています〔…〕。〔…〕リーフレットを手押し車にのせて〔…〕配りましょう。「公衆」にアプローチする新しい方法を見つけましょう〔Wolff 223〕。ウルフが一般的には「私的」にしかみえない空間と活動を「公的」とみなしていることは明らかである。

ウルフの逆説をいくぶん受け入れやすくするであろう、こうしたカントとの共通性は、しかし、二つの問題を発生させる。

第一の問題。カントとウルフのあいだには、しかしながら、決定的な差異がないか。カントのいう「学者」はニュートラル

である。それには年齢も性別もない。対してウルフのいう「アウトサイダー」は、論理的にみればニュートラルである反面、「教育ある男を父にもつ娘たち」という特殊な存在をモデルとする。「教育ある男」が明らかに理性の私的使用を旨とする存在であつてみれば、ウルフはカントの私的／公的を、事実上、男／女によって性別化しているといつてよい。しかし、すでに確認したように、後項（公的、女）は前項（私的、男）の自己差異としてある以上、前項と後項の差異は、たんにセックスやジェンダーの差異に還元できるものではない。では、われわれはこの性的差異をどのように考えるべきなのか。この問題に対する答えとして、私は、カントの理性使用の二分法はそれ自体、精神分析的な意味で性別化されている、と主張するつもりである。

第二の問題。理性の公的使用あるいは「知的自由」は、本来に「影響力」をもつか。「啓蒙とは何か」の結びを読めば分かるように、またラカン派の思想家スラヴォイ・ジジエクも強調するように、カントの啓蒙の定式は「考え、かつ服従せよ」である。つまり「公的」には（理性を自由に使用して）考え、私的には（位階秩序的な権力機構の一部として）服従せよ、ということである。この意味でカントは、思考を実践から差し引き、思考の効力を中断してゐる (*Zügel, Less than Nothing*)

980)。同じことはウルフにもいえないか。ウルフは「娘たち」

に就職するな（理性の私的使用に従事するな）とはいっていない。逆である——ただしもちろん「知的自由」を手放すな、と付け加えたうえで。では、この場合も「知的自由」の「影響力」は中断されるのだろうか。

これは厄介な問題だが、ジジェクはそれを指摘するだけでなく、それを乗り越える道も示唆している。

理性の公的使用における効力の中断は、同時に、なんらかの新しい社会的実践のための場をひらく差し引きではないか。

カントのいう理性の公的使用とマルクスのいう革命的な階級意識とのあいだには明白な差異がある、と指摘するのはたやすい。前者はニュートラルあるいは非実践的であり、後者は「偏っていて」完全に実践的である、と。しかし「プロレタリアートの立場」は、まさしく、理性の公的使用が理性の私的使用という「プライベートシー」へ後退することなしにそのまま実践的——効果的になる地点として定義することができる。なぜならこの場合、理性の公的使用を實踐する立場は、社会組織の「全体の一部ではない部分」（非部分という部分 *part of no-part*）の立場、すなわち、普遍性を直接代表する、社会組織にとつての過剰であるからだ。（Žižek, *Less than*

Nothing 981)

この一節は、適切に言葉を変えれば、第二の問題に対する私の答えをおおむね——わざわざこう断わる理由は本論の最後で明らかになる——代弁するものとなるだろう。すなわち「マルクス」を「ウルフ」に、「革命的な階級意識」を「知的自由」に、「プロレタリアート」を「教育ある男を父にもつ娘たち」に置き換えれば。要するに私は、「労働者階級の女たちよりも弱い」「娘たち」、その意味でいわば階級未満の階級を形成する彼女たちを、社会組織の内部に含まれていながら固有の場所をもたない、社会組織の「一部ではない部分」としてとらえたいのである。

2 理性使用の二律背反

すでに指摘したように、理性の私的使用者（将校、市民、聖職者、等々）は社会組織内に登録された地位をもつが、公的使用者（学者）はそうではない。後者はつねにそうした地位からのずれとしてあるとしかいえないようななかである。両者の差異は地位間の差異ではなく、地位（社会組織の部分）と非——地位（非——部分）の差異である。両者は同じ位相にはない。したがって理性の私的使用と公的使用は、たんなる二項対立で

ない。

この差異は、よりカント的に、二組の二律背反の差異としてとらえ直せまいだろうか。理性の使用形態は、私的公的か、二つしかない。両者の中間や混合はない。なぜなら理性を自由に使う限りそれは公的使用だが、少しでも自由が制限されれば、それは私的使用になるからである。だが、それにもかかわらず（つまり、われわれが必ずどちらかの使用法に属さざるを得ないにもかかわらず）、私はこう主張したい。それぞれの使用モードは使用者の全体（集合）を形成できない、そして、理性の使用の仕方の違いはこの形成の失敗の仕方の違いでもある、と。理性の私的使用者は、定義上なんらかの社会的地位をもつ。社会的地位を同じくする者たちは、理性を同じように使う者たちからなる一つの閉じられた全体、〈一〉なるものを形成する。しかし、ここではつねに、理性の特定の使い方を彼らに命じる、彼らのメタレベルに立つ存在（将校でいえばその上官）、つまり「受動的な態度」を逃れている少なくとも一人の存在が前提とされている。この全体は、そこから逃れたこの構成的例外があつて、はじめて形成されるのである。理性の私的使用はこのように、例外と全体のパラドクス（全体は少なくとも一つの要素を欠いている）を発生させる。これは一組の二律背反として次のように定式化できるだろう。

理性使用の命令を受けていない者が少なくとも一人存在する。
すべての者が理性使用の命令を受けている。

一方、公的使用の場合、例外は存在しない。ここで理性使用を命じるのは、使用者本人だからである。だが、この使用者たちは、例外者を否定するにもかかわらず、全体を形成できない。理由は、彼らには全体の形成につながる特定の命令や関心への従属のような明示的な資格条件がないからだけではない。カントのいう「学者」には誰もがなりうるからである。つまりこの集合のメンバーは無限定であり、すべて（全体）に行き着くことがない。こうして理性の公的使用は、例外の否定による非—全体というパラドクスを発生させる。これもまた一組の二律背反として定式化することが可能である。

理性使用の命令を受けていない者は存在しない。
すべての者が理性使用の命令を受けているわけではない。

理性使用の二つの様式をこのようにとらえ直したとき、実のところわれわれはすでに、ジャック・ラカンが『セミネールX』の「性別化 *sexuation* の定式」の表で示した、精神分析的

$\exists x$	$\overline{\Phi x}$	$\exists x$	$\overline{\Phi x}$
$\forall x$	Φx	$\forall x$	Φx
δ		$S(A)$	
Φ		α	

な意味での性的差異を手にかけている。なぜならこの性的差異もまた、理性使用における二組の二律背反とまったく同じ論理によって構成された、二組の二律背反のあいだの差異として定式化されるからである。カントが理性使用者を二つの集合（私的と公的）に分けたように、ラカ

ンは、話す（言語に参入した）主体——彼流にいえば「ファルスの作用を受ける」主体ということになるが、このファルス（ Φ ）についてはあとでふれる——を、この「作用」の受け方の違いによって二つの性に分ける（性別化の表の左側が男性、右側が女性である）。さらに、カントが暗黙にそれぞれの集合を二律背反に追い込んだように、ラカンは明確にそれぞれの性を二律背反のかたちで定式化する（表の上部の二組の論理式）。そして、ここが肝心なのだが、男性の定式

$\exists x \Phi x$: ファルスの作用を受けていないXが少なくとも一つ存在する。

$\forall x \Phi x$: すべてのXがファルスの作用を受けている。

は、理性の私的使用の二律背反と同様の例外と全体のパラドク

スを作動させ、女性の定式

$\exists x \overline{\Phi x}$: ファルスの作用を受けていないXは一つも存在しない。

$\forall x \overline{\Phi x}$: すべてのXがファルスの作用を受けているわけではない。

は、公的使用の二律背反と同様の例外の否定と非——全体（すべてではない）のパラドクスを作動させる。

このような事態は特異なことと思われるかもしれないが、実はそうではない。というのも、ここでは詳しくふれないが、ジエクやジョアン・コブチェクといった影響力の強いラカン派の思想家はこれまで、カントの「純粹理性の二律背反」の二つの様態（力学的、数学的）のなかに、このラカンの性別化の定式のマトリクスを見出してきたからである。「カントの純粹理性の二律背反は、哲学的言説のなかに性的差異が、（…）二律背反の二つのタイプの差異というかたちで、初めて書き込まれた瞬間を指し示してゐる」（Žižek, *Tarrying with the Negative* 56 [強調は原文]）。（詳細な議論としては、コブチェクの古典的論文「性と理性の安楽死」[『わたしの欲望を読みなさい』所収]を参照されたい）そうだとすれば、われわれが「啓蒙とは何

か」に見出すのは、性的差異が理性使用の二律背反というかたちでカント哲学のなかに再度書き込まれた瞬間である、といえるだろう。

先に進む前に、一つ注意しておきたいことがある。私は「二つの性」といったが、これは厳密には正しくない。女性が全体一なるものを形成できない以上、その性を一つと数えることはできないからである。「女は〔…〕その本質において非—全体 not-whole であるため、〈女〉なるものは存在しない」(Uacan 73-72)。(このことは、性別化の表では抹消されたフランス語の女性定冠詞『*elle*で表されている。』したがってこういえるだろう。「性 sexes は一つ以上、二つ未満である。性を二つと数えることはできない。存在するのは、一と一を逃れるなにか(正確に言えば、なにかとはいえないが無以上のもの)だけである」(Žižek, *Less than Nothing* 770)。(性別化の表の a は、〈一〉の側からみて曰く言い難いこの「なにか」を表す。)カントの議論に置き換えていえば、理性の私的使用者の集合が、社会組織の「部分」を形成する「一」であるのに対し、その部分からのずれとしてある非—部分としての「学者」は「一を逃れるなにか」である。前者が社会的地位として社会の象徴秩序に登録されているとすれば、後者は零以上一未満の、登録不可能ななにかである。このように社会の象徴秩序は、理性の公的使用

の発生とともに機能不全におちいる。この意味で「学者」は、女性同様、象徴秩序の不完全性のシニフィアン(S(x))にかわっている。

3 ファルスをもつこと、ファルスであること

こうした抽象的な、しかしラカント的にいえば「リアルな」差異は、われわれの具体的な性的差異の経験と、どのように関連するのだろうか。ここにおいて『三ギニー』は重要な意味を帯びるのだが、そのことを理解するには、まずファルスがなんであるかを知る必要がある。われわれは理性使用の二律背反と性別化の定式とのあいだに論理—形式上の相同性を認めた。つまり「理性使用の命令を受ける」ことと「ファルスの作用を受ける」ことを等置した。この等式を、カントの議論を精神分析に翻訳するためのマスターコードとして用いながら——私はそれによってこのコードの正しさが事後的に証明されることを望んでいる——ファルスの機能について確認しよう。

二つの理性使用の違いは、理性使用の命令の受け方の違いでもある。つまり、他人、カントのいう「後見人」から命令を受けるか(私的使用)、受け手自身が命令者であるか(公的使用)の違い、いわば、主体が命令をもつか、主体自身が命令である

かの違いである。ここでカントが、「大半の人間」は「成年状態への歩みは困難であるだけでなく危険であると考える」と指摘していたことを思い出そう（カント25）。つまり、ひとは通常、理性の公的使用者であるよりは私的使用者であること、命令であるよりは命令をもつことを望むのである。だが、そうだとすれば、この欲望はつねに、命令を失うことの不安をとまなうはずである。なぜならその命令は、もつべき命令、逆にいえば、失うおそれのある命令だからである。反対に、理性の公的使用者は、この不安とは無縁である。自分自身が命令であるこの存在は、そもそも、失うおそれのある命令などもっていないからだ。

このことと先のマスターコードをふまれば、性別化の定式におけるファルスの作用の差異は、ファルスをもつこと（男性の側）とファルスであること（女性の側）の差異として書き直されるはずである。この判断に間違いはない。というのも精神分析は、ひとが理性の私的使用者として社会的地位に就くときに起こることが、まさにファルスをもつことによって起こる、と考えるからである。

ファルスをそのシニフィアンとする象徴的去勢とは、なんだろうか。われわれはファルスをシニフィアンとして考えるところからはじめるべきである。だが、これはどういう意味か。

周知のように、伝統的な任官式の儀式で用いられる物は、権力を「象徴化」するだけでなく、それを手にした者を、権力を効果的に行使する地位に就かせる。王が錫杖をもち王冠をかぶるとき、その言葉は王の言葉とみなされるのだ。そうした記章は外的なものであって、私の本性の一部ではない。私はそれを纏う。権力を行使するためにそれを身に着ける。そういうものとして記章は、私を「去勢する」。つまり記章は、現にある私という存在と私が果たす役割とのあいだのギャップをもたらずのである（…）。これが悪名高い「象徴的去勢」の意味である。つまり「…」去勢は、象徴界のなかに捕らわれる、象徴的命令を受け入れる、という事実（性別化の表では8で表されている）によって起こる。去勢とは、現にある私という存在と私にこの「権威」を付与する象徴的命令とのあいだのギャップである。まさしくこの意味で去勢は、権力の反義語ではなく、その同義語である。去勢は私に権力を授けるものなのだ。われわれはファルスを、私という存在の生命力、私の雄々しさ、などを直接表現する器官としてではなく、まさにそうした記章として、王や裁判官が記章を身に付けるのと同様に私が身に付ける仮面として考える必要がある。ファルスとは、私が身に付ける「身体なき器官」、私の身体に取り付けられてはいるもののその「有機的部位」になるこ

とはない、異質で過剰な補足物として永遠に身体から付き出たままの「身体なき器官」である。(Zizek, *Less than Nothing* 596 強調は原文)

王冠や錫杖にイえることは、軍人の勲章や裁判官のかつらももちろん、ビジネスマンのネクタイにもイえるだろう(おもしろいことに、これらはどれも伝統的に女性が身に着けないものである)。要するに、精神分析は、理性の私的使用者になることを「象徴的去勢」と呼び、理性の私的使用者が「象徴的去勢」のしるし、ラカン流に言えば「シニフィアン」として身に着ける物を「ファルス」と呼ぶ、ということである。理性の私的使用者がファルスをもつとすれば、公的使用者は、自身がファルスとしてある(自身が理性使用の命令者であること)によってその存在自体が命令のしるしとなる)のであって、ファルスをもつのではない(理性使用の権限を他者から与えられることはない)といえるだろう。実際、カントのいう「学者」になるのに記章を身に着ける必要はない。そもそも「学者」の記章などありえない。記章(ファルス)を身に着ければ、その瞬間にひとは「学者」ではなくなるからである。

ファルスであることとファルスをもたないこと。これこそは、ウルフのいう「アウトサイダー」の条件ではないだろうか。

『三ギニー』では「アウトサイダー」が拒絶すべきことが二つ強調されている。一つはマニフェストに署名すること、もう一つは記章を身に着けること。ここまで議論を進めてきたわれわれにとって、これはなんら不思議なことではない。マニフェストに署名することが他者の象徴的命令に従属することであり、記章を身に着けることが理性の私的利用者になることであってみれば、この二つは、理性の公的使用(ファルスであること)の放棄につながるのである。さらに記章の拒否は、ウルフにおいて性的差異の問題とも関連している。ウルフは男女の差異を、なによりも服装の差異として強調する。これは服装にジェンダーやセックスの差異が反映されるということではないし、服装を通じて性差がバフォーマティヴに構築されるということでもない。ウルフによれば、男の服は女の服とは違い「着る者の社会的、職業的、知的立場を宣伝するはたらき」がある(Woolf 137)。男の着る服の「ボタン、ばら飾り、ストライプにはどれも象徴的な意味があるように思われる」が、女は「そうした服を着ることを禁じられている」(Woolf 134, 138)。つまりウルフがいわんとしているのは、男の服は記章≡ファルスであるが、女はそうした記章≡ファルスを身に着けない、ということである(『三ギニー』に収められた写真は、すべて記章を身に着けた男たちの写真である)。ファルスをもつことは理性の公的使

用を放棄することであるわけだが、ウルフの考えも基本的に同じである。彼女にとって、記事を身に付け、自分の地位や榮譽を見せびらかし、それによって「脚光」を浴びることは「人間の能力の自由な活動を麻痺させ、変革し新たな統一体を創造する人間の力を抑制する」(Woolf 240) ことなのだ。したがって「アウトサイダー」は、「知的自由」を旨とする以上、ファルスをもってはならない。「アウトサイダーは」個人的な榮譽のしるし——メダル、リボン、バッジ、大学式服の背部の垂れ布、ガウン——を必要としませんが、その理由は「…」そうしたしるしが、明らかに制限、固定観念、破壊といったことを生み出すからです」(Woolf 239-240)。「制限」がとくに自由の制限を指し、「破壊」が具体的には戦争を意味することは、まず間違いないだろう。

ウルフは、「教育ある男を父にもつ娘たち」はこうした「榮譽のしるしや制服をすべて拒絶できます。これは当面の問題——いかに戦争を防ぐか——に対する些細な、しかし決定的な貢献となるでしょう」(Woolf 138) といったが、この言葉は多くのひとを困惑させたにちがいない。記事や制服を身に着けないといった文化的行為が、なぜ戦争の防止といった政治的效果をもつのか、と。答えは一つしかない。記事や制服は、「教育ある男たち」が失うことをおそれるファルスだからである。

4 ファルスを差し引く

そうだとすれば、理性の私的使用に執着する——それゆえ戦争に関しては公的(カント的にいえば私的) 関心から戦争支持の立場に立たざるをえない——「教育ある男たち」に抵抗するもっとも有効な手段は、彼らからファルスを取り上げることである、といえるだろう。これはいっけんうまくいきそうにない。この「男たち」がファルス(記事)を自分から手放すとは思えないからである。しかし、彼らもちたいたいと思いつながら、彼らの自由にはならないファルスが、一つだけある。それは彼らの「娘たち」である。彼女たちは、ファルスそのものであり且つ自由に考え行動できる「アウトサイダー」である限りにおいて、ファルスである自分自身を、社会組織から、そして社会組織に組み込まれた「男たち」の手から差し引くことができる。私が最後にウルフのテクストに読み取りたいのは、この差し引きの政治学の可能性である。

ウルフは「アウトサイダーたちのソサイアティ」が現に機能していることを示すために三つの例をあげている。(むろん「ソサイアティ」とはいっても、これは普通の協会や団体とは違う。一言でいえば、それは「学者」たちの潜在的なアソシエ

ーションのようなものである。) 一つ目は、すでにふれたウリッジの首長。これは「知的自由」の行使(ファルスであること)の例である。二つ目は、勝利チームに賞杯やメダルを授与することを廃止した女性スポーツ団体。これは「記章」の拒否(ファルスをもたないこと)の例といえる。三つ目は、教会に参集する若い女性の数が激減しているという当時の状況。ウルフはこの例を「消極性〔無活動 *passivity*〕の実験」と呼ぶ。ウルフが引用するレポートによれば、伝統的に若い女性のヴォランティアに頼ってきた(その反面「教育ある男」には高い地位と給料を与えてきた)教会は、この「娘たち」の態度に「相応な不安」をおぼえる。地位の改善や給与などを積極的に要求するよりも、教会に行かないという「消極性」がかえって強い影響力を發揮したわけである。これこそが私の考える差し引きの政治学である。「引き下がることは」とウルフはいう、「バザーで人に向かって話したり、試合における従来の慣習を取り除いたりするよりも簡単なことです」(Woolf 244)。だが、その効果は逆説的に大きい。「消極性の実験は、消極性は積極性であるということ、外部にいる者たちも役割を果たせるということを示しているように思われます。その者たちの不在が意識されることによって、その者たちの現前が望まれることになりま

す」(Woolf 245)。不在であることによってかえって不安を与

える対象——これはまさしくファルスの特徴である。

差し引きの政治学が、さらに大きな効果を發揮しうる場所がある。それは「娘たち」の父親がいる場所、家庭である。ウルフは「教育ある男」の家庭を、娘の学費を削って息子を教育し公職に就かせるシステム、つまりは理性の私的使用者を再生産する装置としてとらえている。「娘」とは、いわばこの装置の症候的な捻じれに付けられた名前ではないだろうか。なぜなら娘は、この装置にとって、ほとんど無であるにもかかわらず、要不可欠なものであるからだ。公職に就く男たちがつねに「記章」を保持しようとするように(男の服装は一年中同じで、季節ごとに「個人的」好みで服を変える女からみると奇妙である、とウルフはいう)、父親は娘を保持しようとする。なぜなら「記章」がそれを身に付けた者の社会的身分を存立させるように、娘は、彼女を所持する父親の男性性を支えるからである。「妻と娘を扶養したいという欲望。これ以上に強力で根深い動機があるでしょうか。というのも、それは男らしさそのものと結びついていたからです。家族を養えない男は、自分自身で男らしさを思い描くこともできなかったのです」(Woolf 267)。この意味で娘は、父親にとってある種の「記章」、ファルスである。そうだとすれば、「娘たち」がこの父親との関係から身を差し引くことができれば、父親たちの男性性の地盤は崩れ、

理性の私的使用者を再生産する装置は失調をきたすだろう。

(この差し引きを実践するためには、もちろん「娘たち」が経済的に自立できる社会環境が必要であり、ウルフもそれを強く主張している。しかし、その自立が理性を私的に使用する「教育ある男たち」と同様の就職形態に帰着してしまつては、元も子もない。それを避けるためには、経済的自立が差し引きの政治学の条件であつて目的ではないということを経に銘じておく必要がある。)

「教育ある男を父にもつ娘たちよ、アウトサイダーたれ！」というウルフのモットーが政治的に有効なのは、「娘たち」が社会組織から自らを差し引くことが、結局、社会組織からファル

スを差し引くことと同じだからである。「アウトサイダー」であることが「ブライヴァシー」へ後退することなしに実践的効果的でありうるのは、その限りについて——つまり、娘たちがファルスとしてある、いいかえれば、娘たちが精神分析的な意味での性的差異を「教育ある男たち」とのあいだで確保する限りについて——である。したがってわれわれは、理性の公的使用は社会組織の「全体の一部ではない部分」の立場から実践されるとき効果的になるというジジエクのテーゼに、いまや重要な補足を付け加えることができる。この実践がさらに効果的になるのは、この「全体の一部ではない部分」の立場が、ファルスである、女の立場と重なるときである、と。

参考文献

- Copjec, Joan. *Read My Desire: Lacan against the* *Book XX: On Feminine Sexuality, The Limits*
Historists. Cambridge, Ma: MIT P, 1994. (注) *of Love and Knowledge, 1972-1973 (Encores)*.
『アン・ロブ・チャェン』わたしの欲望を読みなご Ed Jacques-Alain Miller. Trans. Bruce Fink.
い——ラカン理論によるフォーリー批判』梶理和 New York: Norton, 1998.
子、下河辺美知子、鈴木英明、村山敏勝訳、青 Wolf, Virginia. *A Room of One's Own and Three*
士社、一九九八年) Guineas. Harmondsworth: Penguin, 1993.
Lacan, Jacques. *The Seminar of Jacques Lacan, Zizek, Slavoj. Less than Nothing: Hegel and the*
Shadow of Dialectical Materialism. London: Verso, 2012.
———. *Tarrying with the Negative: Kant, Hegel, and the Critique of Ideology*. Durham: Duke UP, 2003.
カント『啓蒙とは何か』福田喜一郎訳、『カント全集14』岩波書店、二〇〇〇年、所収。